

の間に多く認められる此の種の整つた論述の形式を賞讃せられ、論文の形はかく有りたいなどゝ語られたことから考へても、この方面から受けられた影響も少くなかったと思はれる。博士の論述が、晩年になるに従つてこの體裁上の特徴を發揮することの多いのは、年齢と共にその學風が愈々堅實を加へ、叙述の形式に於ても些の曖昧を許さない論理的記述を益々尊重せられた結果に外ならぬ。

此の如く、博士の論述は例へば數學に於ける方程式に類する行き方ともいふべく、形式に於ても内容に於ても、立論の確實を保つことに於て寸隙のないやうに努められたに拘らず、その史筆はこの種の記述に有り勝ちの無味乾燥に陥るものとは選を異にし、よく人をしてその精細なる論述の全篇を面白く通讀せしむる魅惑力を有つてゐた。これは行文に態とらしき點がなく、平易流暢の間に、時に生得の軽い諧謔を挟むやうな餘裕のあると共に、その博覽に依つて得た史趣に富める逸話俚諺の如きをも、採るべきは縦横に活用し、讀者の興味を惹きつけたが爲であつて、天性と努力とによる巧妙なる史筆と謂はなければならぬ。

博士は本書所收「歴史上より見たる南北支那」の備考三十六に於て、清一代の史家として推される錢大昕と趙翼との學風の特色を擧げ、前者の堅實と後者の綜合歸納的論斷との長所を賞揚し、併せて王鳴盛の兩者に及ばざるところをも指摘せられた。錢・趙二家の長所を各個に此の如く認められた博士が、一人にしてよく兩者を兼備せらるゝに至つたのは、自から然るべきところである。名工の材を選び尺度を正して作り上げた堂塔は、千歳の風雨に曝されて尙且つ微しの歪曲をも生じない。博士の苦心の結成した本論叢の諸篇は、明治より昭和に亘る我が東洋史學研究の記念塔として、永遠に高く聳えるであらう。後學自から揣らず、編輯諸氏の需に任せ、聊か思ふ所を叙べて